

の心也  
 一汗ながる、也  
 二はづかしき心也  
 三眞向にはいさか物も申しがたしと也  
 四清少の恥ぢたる心の、顔色にも見ゆらんにと也  
 五伊周立ち給へかしと也  
 六清少のかほをかくしたる也  
 七伊周の立ち給はぬ也  
 八勿論也、清少の恥ぢらん宮のおしはかり給ふ也  
 九清少心也  
 一〇伊周の詞也、これへ給はれと也  
 一一后宮の詞也  
 一二伊周の詞、清少をうごかさじ

たるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「給ひて見侍らん」と申し給へば、「猶ここへ」との給はすれば、「人を捕へて立て侍らぬなり」との給ふ。いと今めかしう、身の程年には合はず、傍痛し。人の草假名書きたる草紙取り出でて御覽す。誰かにかあらん。かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見しりて侍らん」と、怪しき事どもを、只應へさせんと給ふ。

- さぞと申すにこそあらめ——是は元輔のむすめの清少納言、新夢の由を申すなるべし。
- まことにさありしなど——眞實に清少を思ひてありしと、の給ひたはむれ給ふなるべし。前に女房にぞろごとなどの給ひかゝると有りし首尾なり。
- 行幸など見るに——年來行幸など見し折に、伊周公供奉にて清少の物見る車を見おこせ給ひしさへ、顔かくしなどせしとの心也。
- おほけなくいかで立ち出でにし——かくはづかしき所へ、おほけなくも、宮仕へに出でにしよと恥しさに思ふ也。
- かしこきかけとささげ——我影かくすかたじけなき蔭と頼みたる扇をも伊周公の取り給ふ也。
- ふりかくべきかみの——扇はとらるゝ。せめて面がくしに髪をふりかけんも見ぐるしからんとおもふと也。

さの心也  
 一清少也  
 二伊周の詞、誰が手跡ならん、清少にみせ給へと也  
 一花やかなる也  
 二猿也、されと也  
 三物をほめ笑ひし也  
 四のちにはさもうひうひしとすも也  
 五宮仕へに出でそめし時の事也  
 六清少のごとくはづかしからんと也  
 七面馴見たる、心也

- あふぎを手まさぐりに——清少の扇を伊周の手まさぐり給ふ也。
- しろいものうつりて——清少の汗に白粉ながれてからぎぬにうつる心也。
- これ見給へ、これはたが書きたる——清少のために伊周をたたせ給はんとて此繪を見給へと后宮の給ふ也。
- いといまめかしう——清少いま廿歳ばかりにや有りけん。かやうのいまめかしたはぶれば、年齢にも身のほどにも相應せずと也。
- 人のさうがなかきたる——草假名。かの后宮の見せ給へる繪草紙の事也。

一所たにあるに、又さき打ち追はせて、同じ直衣の人参らせ給ひて、これは今少し花やぎ、さるがう事などうちし、譽め笑ひ興じ、我も何がとある事かゝる事など、殿上人の上など申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり来るにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日頃過ぐれば、いとさしもなき業にこそ有りけれ。かく見る人々も、家の内出て初めけん程は、さこそは覺えけめど、かくしもて行くに、おのづから面馴れぬべし。

- おなじなほしの人——山井大納言歎。中納言隆家卿なるべし。
- われも何がとある事——此詞上に連続せず。若しくは落字などあるにや。但しひて義をとり侍らば、われも何がとある事とは、彼同じ直衣の人も人の上のとありかゝりを申さるゝ也。殿上人の口をもとりませ申さるゝをさき



一是より后宮の清少へ仰せられし事也  
 二清少の御返事申すにさしあはせて也  
 三妬む者のわざさせしなるべし  
 四后宮の御詞  
 五清少心也  
 六大かたにも思ひ奉らぬ也  
 七折ふしきかしらにはなひたるをにくめる也  
 八はなひる事をいめほさ也  
 九后宮の御前にて咒咀せしやうなれほ也  
 十新参の時なれば、彼咒咀する人のわざなごも申しあひざりし

ば、清少のうひうひしき心には、變化の物天人などやうに覺えしと也。  
 ○かく見る人々も——后宮の御かたに侍る女房達をさしていふ也。  
 「物など仰せられて、我をば思ふや」と問はせ給ふ。御應へに、「いかにかは、」と啓するに合はせて、臺盤所のかたに、鼻を高くひたれば、「あな心う。虚言するなりけり。よし／＼」とて入らせ給ひぬ。争てか虚言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事は。鼻こそは虚言しけれと覺ゆ。さても誰か、かく憎き業しつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎ返してあるを、まして憎しと思へど、まだうひ／＼しければ、兎も角も啓しなほさて、明けぬればおりたる即ち、淺緑なる薄様に、艶なる文を持て來たり。見れば、  
 「いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば」となん。御けしきは」とあるに、めでたくも口惜しくも思ひ亂るゝに、猶よべの人ぞ尋ね聞かまほしき。  
 「うすきこそそれにもよらぬ花故に、うき身のほどを知るぞ佗しき猶こればかりは啓し直させ給へ。職の神もおのづからいとかしこし」とて、參らせて後も、うたて折しも、などてさはたありけん、いとをかし。  
 ○いかにかはとけいするに——いかにかは思ひ奉らざらんと清少の申し上ぐる也。

也  
 二御前より局におりし也  
 三后宮の御文也  
 四右筆の御うたり、后宮の御けしきは如此といへる詞也  
 五かのはなひし人は何人ぞまききたき也  
 六清少返歌  
 七此偽りの御事は申し直して給へと、取次の人に申す也  
 八のろひ神もおそろし也  
 九是も彼もはなひしをわやしむ詞也

○だいはん所のかたに——后宮の御かたの臺盤所女房の侍なり。  
 ○そらごとするなりけり——清少思ふとは偽ならん。隣にはなひつればとの御たはむれ也。清輔典義抄云、人の事を思ひくはだつるに、はなひつればならんと云云。さやうの心にて、后宮もかくの給へるにや。毛詩世風篇、願言則嚏註云、俗人嚏云人道我、此古之遺語也云云。  
 ○わがさる折もおしひしきかへしてあるを——尋常にも人の嚏つれば、其はなひ返してある物をと也。人のはなひたる時、又はなひ返さねば、わるき事有りと世俗にいひならはす事のゆゑなり。  
 ○いかにしていかに——清少の思ふといふを偽ならずと、いかにしてしらん。若し偽を糺の神あらばこそ知るべけれとの心也。大和物語異本に、「偽を糺の森のゆふだすきかけてをちかへ、われをおもはじ」  
 ○めでたくも口をしくも——后宮の仰せは辱くも、又彼はなひしゆゑに偽なども給へば口惜しくもと也。  
 ○うすきこそそれにも——花を嚏にそへて也。薄き思ひこそはかなき嚏などにも妨げらるべけれ。是は眞實にて、それらの咒咀にもよるまじき事故に、かく偽と思し召さるは、うき身の不幸思ひしられて佗しきと也。  
 ○しきの神もおのづから——職の神也。咒咀などにて災難をなす神也。宇治拾



一 櫻したる心也  
 二 最初  
 三 あらそふ也  
 四 蔵人四人の内闘ありてあまた望み争ふ也  
 五 其年闘ある中に、第一の闘を受領したる也  
 六 答に也  
 七 とき人のむすめを、これかれあらそひ望みし中に也  
 八 調伏也  
 九 験者也  
 一〇 極道也  
 一一 疾也  
 一二 小弓の勝負に相手のさまじくまざらばし妨ぐ

遣に少將なりける人の、しき神にふせられて安倍清明に加持せられし事あり。又清明もしき神つかへる事など有り。

百六十四

したり顔なる物。正月一日のつとめて、最初に噓ひたる人。きしろふたびの蔵人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目にその年の一の國得たる人の、喜びなど言ひて、「いとかしこうなり給へり」など人の言ふ應へに、「何か。いと異様にほろびて侍るなれば」など言ふもしたり顔也。又人多く挑みたる中に、えられて婿に取られたるも、我はと思ひぬべし。こはき物怪調したる験者。頑塞きの明とうしたる。小弓射るに、片つ方の人、咳をし紛はして騒ぐに、念じて、音高う射て中てたるこそ、したり顔なるけしきなれ。碁を打つにさばかりと知らず、ふくつけさは、又、こと所にかまぐりありくに、異方より目もなくして、多く拾ひ取りたるも嬉しからじや。誇りかに打ち笑ひ、唯の勝ちよりは誇りかなり。ありくして、受領に成りたる人の氣色こそ嬉しげなれ。僅にある從者のなめげに侮づるも、妬しと思ひ聞えながら、いかがせんとて念じ過しつるに、我にも勝る者どもの畏まり、只仰せうけ給はらんと追從する様は、ありし人とやは見えたる。女房打ち使ひ、見えざりし調度、装束のわき出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと君達の成りあ

る也  
 一 三的に矢の音のたかき也  
 二 四のしが手前にさらる、所ありしらで也  
 三 五、き  
 四 云うれしからん也  
 五 七、したりがほなる心也  
 六 八、久しくならで受領したる也  
 七 九、受領ならぬ已前の事也  
 八 一〇、も  
 九 一一、無禮也  
 一〇 一二、受領ならぬききとは格別也  
 一三 今までなかりし女房も有る也  
 一四 是より位のもでたき事をついでにいふ也  
 一五 云叙爵せし人を云ふ也  
 一六 是はむるこまは

がりたるよりも、け高うしたり顔に、いみじう思ひためれ。位こそ猶、めてたき物にはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍從の君など聞ゆる折は、いと侮り易き物を、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせん方なく、やんごとなく覺え給ふ事のこよなさよ。程々につけては、受領もさこそはあめれ。數多國に行きて、大貳や四位などになりて、上達部になりぬればおもおもし。されどざりとて程過ぎ、なにばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人の幸には思ひてあめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめてたけれ。されど猶男は、我身のなり出づるこそめてたく、うち仰ぎたる氣色よ。法師の何がし供奉など言ひて歩くなどは、何とかは見ゆる。經卷く讀み、みめ清けなるにつけても、女に侮られて、なりかかりこそすれ。僧都、僧正に成りぬれば、佛の現れ給へるにこそと覺し感ひて、畏まる様は、何にかは似たる。

○したりがほなる物——イ本、此奥の上達部はといふより、春宮の御母女御といふ迄を書きて、其次に此題以下あり。

○正月一日のつとめて——世俗に、元日噺るは長命の相といへば也。袖中抄云四分律云、時世尊噺、諸比丘咒願言「長壽」。今案今俗正月元且若早且噺即稱曰「千秋萬歳急急如律令」是緣也。何只在三元日一哉。尋常禱之。

○何かいとことやうにほろび——受領は、朝廷奉公の志ある人は本意とせず。



也  
 三六格別々の心也  
 三元宰相になるなり、宰相以上を  
 上達部と云ふ也  
 三受領はかぎりありて、ほかに過ぎてさまでの事なし也  
 三大貳四位になりて、公卿になるはまれなり也  
 三よきさいはひとする心也  
 三女の後になり給ふより、翁男のなり出たるはしたりがほなる也  
 三同さまでもなき心也  
 三形懸りばかりこそつくろへ何のかひなし也  
 三よき人々も尊敬のさま也

然れども所務徳分に付きて望む也。されど何か賢からん、異様に亡びて外國に沈淪するものをなど、口にはいへど實は満足の心あるさま也。  
 ○ふたぎの明とうしたる——掩韻。孟津抄云、古集の詩の韻字をふたぎて何の字と推して勝負をする也。其何の字と推しあてたるを明と云ふ也。  
 ○ねんじて音たかり——まぎらはされずよくこらへたもちたる心也。  
 ○ふくつけきは——細流云、食る也。愚案慾がましき心也。遊仙窟食生フクツケビトとよめり。  
 ○かゝぐりありく——かゝづらふ事也。おちくぼ物語三云、かゝくりよる云云。おなじ心也。  
 ○わづかあるずんざ——從者也。日頃頼りなかりし程は、無禮しあなづりし從者のねたかりしも、せんかたなくて過しつるに、受領に成りて後は、從者も誰も追從する心也。  
 ○見えざりしてうど——なかりし道具衣裳なども、俄に出来るをわき出づるといふ也。調度はつかふ道具也。  
 ○もときんだちのなりあがりたるよりも——元來の公達也。公達とは、攝家大臣の息ならでも、近衛の少將、中將を経て、納言以上にのぼる人々をいふ也。清華、英雄とも申す也。さやうの人々より受領の中將になりしはしたりがほなる也。

一イ、あまかせ、尤可然歟

ると也。  
 ○中納言、大納言、大臣——公卿也。大臣を公といひ、納言は卿也。  
 ○ずりやうもさこそは——受領も大上國の守になりしはこよなしとの心也。  
 ○あまた國に行きて——一任四ヶ年の國守を経て、あまた他國に行きて合格の人をいふ也。  
 ○大貳——大宰府のおほい介也。相當四位也。大宰のかみは帥也。帥は大かた親王の任官にて、筑紫に下り給はず、府務をおこなはざれば、大貳、帥にかはりて筑紫に下りて大宰府の務をおこなふ故に、規模とする官也。  
 ○四位——受領は大かた五位なれば也。  
 ○何がし供奉など——内供奉にや。安惠内供奉、寛算内供奉のたぐひ也。官職便覽云、寶龜三年三月始置内供奉十禪師云云。續日本紀にあり。又延喜式に毎年正月に大極殿にて最勝王經講説の時、内供奉十禪師を講師とする事あり。十禪師とは十人の事也。  
 ○僧都僧正に——僧も位高くなればしたりがほなるとの心也。

百六十五

風は嵐。木枯。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれ也。八九月は



二汗もかわき世  
三生絹也  
四夏あつかりし  
程也  
五格子也  
六風也

かりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれ也。雨のあし横様に、騒がしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣の、汗の香など乾き、生絹の單衣に引き重ねて着たるもをかし。此生絹だに、いと暑かはしう捨てまほしかりしかば、いつの間にかう成りぬらんと思ふもをかし。曉、格子、妻戸など押しあげたるに、嵐のさと吹き渡りて、顔にしみたるこそ、いみじうをかしけれ。九月晦日、十月一日の程の空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ／＼とこぼれ落つる、いとあはれ也。櫻の葉、棕の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

○夏とほしたるわたぎぬ——一夏過したる綿絹也。  
○いつのまにかう成りぬらん——八九月の風の冷やかなりしをおどろく心也。

○かほにしみたる——顔に寒き心也。文選宋王風賦云、其風中人狀直慄慄淋慄。慄、慄也。  
○むくの葉——椋。一名即椋。和名牟久。

百六十六

野分の又の日こそ、いみじう哀に覺ゆれ。立部、透垣などの伏しなみたるに、前裁

ニイ、よろこび  
三木の枝の這ひ  
伏す也  
四萩女郎花をそ  
こなひて、心づ  
きなき心也  
五風也  
六管法なるさま  
也

七こよひ野分の  
ふねざりし故、  
朝ねたる也  
八母屋  
九又他の女房也  
一〇殘暑のころの  
衣服也  
二句  
三句  
四句  
薄紅の上の  
物也

ども心苦しげ也。大きな木ども倒れ、枝なども吹き折られたるに惜しきに、萩、女郎花などの上に、よろほひ這ひ伏せる、いと思はず也。格子の壺などに、さときはを殊更にしたらんやうに、細々と吹き入れたるこそ、荒かりつる風の仕業とも覺えぬ。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、うす物などの小桂着て、まことしく清げなる人の、夜は風の騒ぎに寐覺つれば、久しう寝おきたる儘に、鏡うち見て、母屋より少しるざり出てたる。髪は風に吹きよはされて、少しうちふくだみたるが、肩に懸りたる程、誠にめてたし。物哀れなる景色見る程に、十七八ばかりにやあらん。ちひさくはあらねど、態と大人などとは見えぬが、生絹の單衣のいみじう綻びたる、花もかへり濡れなどしたる、薄色の宿直物を着て、髪は尾花のやうなる殺ぎ末も、たけばかりは衣の裾に外れて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる、童の若き人の根こめに吹き折られたる前裁などを、取り集め起し立てなどするを、羨ましげに推し量りて、つき添ひたる後もをかし。

○野分の又の日——八月の比ぶく暴風也。其明る日の景氣を書く也。源氏のわきの巻も是をかけり。  
○たてじとみすいがい——立部、透垣。  
○ふしなみたるに——野分に吹きたふされて伏し及びたる也。  
○おほきなる木ども——文選風賦云、蹙石伐木梢殺林莽。



- かうしのつばなどに――格子のひと間ひと間を坪といふにや。こまぐと吹き入ると次の詞にあり。此段の風の形容は、莊子が天籟を論じたる詞にをささおとるまじくや。
- いとこきまぬのうはぐもり――こき紅のうへのくろみたる也。
- ねざめつれば――イ本ねられざりつれば云云。
- うちふくだみたる――髪のをそけたる也。源氏におほき詞也。
- 物あはれなるけしきみる――其女房の野分の朝の草花のをれふして、哀なるを見ゆるほどに也。
- 花もかへりぬれなどしたる――かの生絹の單の縹いろなるが色さめて、野分のしぶきにぬれたるさまなり。
- たけばかりはきぬの――髪長くて居長ほどきぬのすそにあまりし也。
- そばより見ゆる――彼物哀なるけしき見る女房の、傍より此十七八の女房の見ゆる也。
- うらやましげに――かの童のわかき人と諸共にせまほしげなる也。
- うしろもをかし――童のうしろ也。彼わかき女房のうしろもこめていへり。

百六十七

- 一 主まおほしき女のこと也
- 二 是女房なるべし
- 三 御膳進むる也
- 四 女房のきぬの打ちたる也
- 五 さわがしからぬ也
- 六 女房のきぬの上にかみのかりしさま也
- 七 后宮ほどの御かた也
- 八 幅袖也
- 九 鈎也、腕のつりはり也
- 一〇 あざやかなる也
- 一一 調也、こしらへし也
- 一二 橋敷、或は階のここにや
- 一三 外也
- 一四 碁石
- 一五 碁筒也
- 一六 碁子也、縁也
- 一七 目覺したる也

心憎き物 物隔てて聞くに、女房とは覺えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答へ若やかにして、うちそよめきて参るけはひ、物参る程にや。箸、匙などの取りませて鳴りたる。提子の柄の倒れ伏すも、耳こそとどまれ。打ちたる衣のあざやかなるに、鬢がしうはあらで、髪振りやられたる。いみじうしつらひたる所の、大殿油は参らで、長炭櫃に、いと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる、鈎のきはやかなるも、けざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたるをかし。箸のいときはやかに筋かひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寝ぬる後に、外のかたにて、殿上人など物言ふに、奥に碁石、碁に入る音のあまた聞えたる、いと心憎し。碁子に火點したる。物隔てて聞くに、人の忍ぶるが、夜中などうち驚きて、言ふ事は聞えず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

- はし――筋、ハシ。箸、同。一名、扶提。和名にあり。
- かひ――飯匙。眞名伊勢物語、和名云、説文云、匕所<sub>カ</sub>以取<sub>テ</sub>飯也。一名匙カ
- イ。
- ひさげのえ――提柄。

百六十八



一八雲、陸奥  
二陸奥  
三未勸

島は 浮島。八十島。たはれ島。水島。松か浦島。籬の島。豊浦の島。たど島。

○うきしま——奥州しほがまの邊也。新古今に「しほがまの前にうきたるうきしまのうきて思ひのある世なりけり」

○やそしま——八雲云、清輔云、出羽にあり云云。普通には只八十島也。愚案、業平の小町が髑髏を見しは出羽の八十島也。小野篁の八十島かけてとよみ給へるは、只おほくのしまといふ義也。

○たはれしま——八雲云、肥後。清輔抄ニハ相模云云。

○みつ島——八雲筑前。萬葉或三島とも、蘆北の野坂の浦に舟出して水島にゆかん波たつなゆめ

○とよらの——豊浦島。八雲長門。

百六十九

一奥州也  
二吹上、八雲  
紀伊  
三未勸

濱は 一そのの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。もろよせの濱。千里の濱こそ廣う思ひやらるれ。

○ながはま——八雲、伊勢云云。

○うちでの——打出濱。八雲 近江。

○千里の濱——伊勢物語紀の國の千里の濱にありける云云。チリのはまとよ

む歟。

百七十

一奥州也  
二近江也  
三紀伊也

浦は 生の浦。磯の浦。滋賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

○おふのうら——生浦也。八雲 伊勢。古今大歌所の歌いせ歌によめり。

○なだかの浦——八雲 遠江云云。萬葉には、きの國のなだかのうらとよめり。

○こりずま——攝津也。八雲に云はく、須磨。こりずまの浦とは同所也。但別なるやうにいふ人もあり云云。

百七十一

寺は 壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住みかなるがあはれなる也。石山。粉川。滋賀。

○つばさか——和泉の法華寺也。又は壺坂寺といへり。本尊は千手観音也。道基上人建立と拾芥に有り。

○かさぎ——笠置寺、大和にあり。本尊は彌勒解脱上人の寺也。

○ほうりん——嵯峨の法輪寺也。僧都道昌一日宴座せらるるに、虚空藏菩薩衣の袖の上に現じ給へり。道昌すなはち袖をきりて圖して、法輪寺に安置せらる



ると、元亨釋書にあり。一説に小栗栖野、法淋寺、常曉律師の太元堂云云。

○高野は——金剛峯寺と號す。元亨釋書一曰、弘仁七年遊三紀州、相勝、依上二高野山、創金剛峯寺云云。

○弘法大師——元亨釋書云、釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、父田公、母阿刀氏、夢梵僧入懷、有身云云。謁唐青龍寺惠果、授灌頂。承和二年三月廿一日、入定。延喜廿一年十月、謚弘法大師。

○石山——聖武御宇、東大寺の佛にみかきぬべき金を得んため祈願に、朗辨上人瀬多に庵して、如意輪を安置して後、奥州より始て黄金を奉りければ、此寺をたてて、丈六の觀音をさきみて、はじめの像を中にこめ、又金剛藏王と執金剛神とを左右に安置せり。猶元亨釋書に委し。

○粉川——紀州那賀郡風市村、粉河寺は、寶龜元年に建つ。獵師大伴孔子古、此山に瑞光を見て、佛を安置せまくおもふに、ふしぎの童來て一七日のほどに、金色の千手觀音をあらはせり。其後河内の澁河郡の佐大夫といふ者、一子の病を此觀音に祈りて平癒せしかば、伊都郡澁田村の富家のやもめ、此事をききたふとみて、此寺をたつるよし、元亨釋書に委し。

○滋賀——崇福寺と號す。近江滋賀郡にあり。ながらの寺とも此滋賀寺を詠ずるよし、八重御抄にあり。天智天皇の御時、此地に瑞光ありて、かたはらに瀧

有り。ふしぎの優姿塞すみて、此地は古仙のかくれふす所の由、帝に申しければ、帝聞し召して、かねて靈地を得て寺をたてんの御心ざしある故、此寺を立て給ふ事、元亨釋書にあり。今は三井寺の末寺のよし拾芥にみゆ。

百七十二

經は法華經は更也。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

○法華經はさら也——妙法蓮華經は、秦の羅什三藏の翻譯。其弟子僧睿の筆受。今の世におこなはるゝは是なり。諸經最第一とすれば、更なりといふなるべし。

○千手經——千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經なるべし。世に千手陀羅尼經といふ是也。西天竺沙門伽梵達摩譯云云。

○ふげん十願——これ華嚴經の普賢行願品をいふなるべし。大方廣佛華嚴經入不思議解脱境界普賢行願品といへり。般若三藏譯云云。此品の中に普賢十種の大行願をたて給ふ。一者禮敬諸佛。二者稱讚如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者隨佛學衆。九者恒順衆生。十者普皆迴向。このゆゑに十大願經といふなるべし。



○ずみぐ經——隨求陀羅尼經一卷あり。不空三藏の翻譯也。滅惡趣菩薩の、一切の衆生の苦を拔濟せん事を世尊に請うて、世尊此だらにをとき授け給へり。この眞言は、三世の諸佛の無數萬劫をへて、毘盧遮那如來の自法界智の中にして、無數劫を盡して求め給へり。此故に隨求郎得眞言と名付云云。

○尊勝だらに——佛頂尊勝陀羅尼經一卷。大唐闍賓佛陀婆利奉勅譯云云。佛在世に、善住太子、七日のうちに死して、地獄におつべきしるしありしに、帝釋あはれみて、佛に此よし申し給へば、佛此だらにをとききづけ給ひて、其難をまぬかれたり。其靈驗無量云云。

○あみだの大す——阿彌陀の眞言也。眞言家には大咒とすみてよめり。阿彌陀根本陀羅尼ともいへり。無量壽軌に出づ云云。惠運錄に別にのせて十甘露眞言と名づく云云。源氏鈴虫巻に、あみだの大すいとたふとく云云。讀くせ口傳。

○せんずだらに——すなはち彼千手陀羅尼經の中にあり。其功德彼經に委し。

百七十三

文は 文集。文撰。博士の申文。

○文集——白樂天が文集也。七十卷あり。白氏長慶集は編やうかはりて七十一卷也。

○文選——梁の昭明太子の、周秦漢より、梁の世までの文をあつめて卅卷あり。唐の李善が註に、五臣の註をくはへて六十卷とす。  
○はかせの申文——官を望みて、除目などに上る文也。其躰延喜式にあり。其品は江次第に委し。中にも博士のは小野篁の申文、三善道統の申文等世に傳はれり。

百七十四

佛は 如意りは、人の心をおぼし煩ひて、つら杖をつきておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手。すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

○如意りは人の心を——是此大士の相好を云ふ也。觀自在如意輪菩薩瑜伽要目、金剛智三藏譯、六臂身金色、住說法相。右第一思惟、第二持寶珠、第三持念珠、左第一按光明山、第二持蓮花、第三持輪云云。この右第一思惟の手は、愍念有情故といへり。此かたちを此双紙にはかくいへるにや。如意輪觀音、或は二臂にて、右は思惟、左は蓮花を持つもあり。これも右は同前、左持蓮花は能淨諸非法故云云。

○千手——千手陀羅尼經曰、即發誓言若我當來堪能利益完樂一切衆生者



令我即時身生二千手千眼。具足發願。已應時身上千手千眼。悉具足云云。  
 ○すべて六觀音——拾芥云、六觀音配六道。大悲觀音、千手變破三地獄道三障。大慈觀音、正觀音變破二餓飢道三障。師子無畏觀音、馬頭變破二畜生道三障。大光普照觀音、十一面變破二修羅道三障。天人丈夫觀音、准變破二人道三障。大梵深遠觀音、如意輪、變破二天道三障。今案眞言宗、并法相宗除准脫觀音、奉加三空縹索觀音。  
 ○不動尊——底哩三昧經上曰、不動者是菩提心、大寂定義也。猶儀軌委。大日經二曰、爲二切障二故、住二火上三昧。  
 ○藥師佛——藥師瑠璃光如來。要文我此名號一經二其耳、業病悉除心身安樂これなり。猶本願功德經に十二願を説き給へり。文しげければ畧す。  
 ○しやか——釋迦牟尼、譯名義集一曰、摠華云、此云三能仁寂默。寂默故不住二生死二能仁故不住二涅槃。悲智兼運立此嘉稱、猶委し。まことに一代教主に扱はすめり。  
 ○みろく——名義集云、彌勒、淨名疏云此彌慈氏。過去爲王名曇摩流支。慈育國人。自爾至今當名慈氏。姓阿達多、此云無能勝云云。みろくは、釋迦の付屬をうけて一生補處の菩薩とす。第一滅劫のはじめに下生し給ふ。成佛して三會に説法すべき故に、當來導師と申す也。釋尊入滅よりみろくの出世までは、五十七俱低六十百千歳をへだつといへり。彌勒下生經には、將來久遠劫於此此國界成佛云云。河海。

一是此物がたりにある事なるべし

までは、五十七俱低六十百千歳をへだつといへり。彌勒下生經には、將來久遠劫於此此國界成佛云云。河海。  
 ○普賢——名義集云、圓覺疏云、一約二自體、體性周遍曰普。隨緣成德曰賢。二約二諸位、曲濟無遺曰普。鄰極亞聖曰賢。三約二當位、德無不周曰普。調柔善順曰賢云云。釋尊法華經を説きはり給ひてのち、普賢ばさち東方の寶威徳國より佛前に來りて、懺法して、四法成就の法門を得て、末代惡世に法華經の行者を守護し惡魔夜叉等の難をまぬかれしめ、未來は成佛せしめんとて二十句陀羅尼をとけり。猶普賢菩薩觀發品に委し。  
 ○地藏——大藏綱目指要錄三曰、地藏十輪經十卷。唐玄奘三藏譯。地則堅厚無レ溼。藏則含無レ盡。以二十佛輪轉二十惡業一故也。六道の衆生濟度のぼさち也。  
 ○文珠——名義集云、文珠師利、此云二妙德。大經云、了見二佛性。猶如二妙德。淨名疏云、若見二佛性。即具三三德。不縱不橫故名二妙德云云。西域記云、曼殊室利。唐言二妙吉祥。

百七十五

物語は、住吉、空穗の類。殿移り。月待つ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國譲り。埋れ木。道心すすむる松が枝。こま野の物語は、ふるきかはほりさし出て



もいにしがをかきき也。

○住吉物語——二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用ゐられしは二卷の住吉物がたりと見ゆ。

○うつぼのるゐ——うつぼ物がたりつたぐひといへる事なるべし。うつぼは廿卷あり。

○殿うつり——是より以下の物語、今の世所見なし。八雲御抄學書の中にも、住吉物がたりの外はしるさせ給はず。其代にもすでに絶々なりしなるべし。

○かたの少將——源氏帚木野分卷等に、其名出でたり。又おちくぼの物語にも、辨の少將を、世の人はかたの少將と申すめりとあり。又右近が父季繩の少將を交野の少將といふよし、支旨法印の百人一首抄に有り。然れども物語は世に傳はらず。

百七十六

一印南野、八雲  
播磨  
二交野、八雲、  
河内  
三栗津、八雲、  
近江

野は 嵯峨野更也。印南野。交野。こま野。栗津野。飛火野。しめぢ野。そうけ野。こそすどろにをかしかけれ。などさつけたるにかあらん。安部野。宮城野。春日野。紫野。

○嵯峨野さら也——昔は秋萩の時など野遊し、撰虫など遊興の所なれば、更也

四八雲抄にも國  
しられず  
五いかでさやう  
に名づけしこ也  
六奥州也  
七大和也

といへるなるべし。

○こま野——山城の駒のわたりにや。猶可尋之。

○飛火野——八雲、大和春日野也。袖中抄云、國史云、和銅五年正月廢高安烽、始置高見及大和國春日烽。以通平城一也云云。

○しめぢ野——八雲云、しめぢ野、山城、是在清輔初學抄云云。おなじ所なるべし。

○あべの——攝州住吉と天王寺とのあはひに安陪野あり。是にや。

○むらさき野——八雲云、近江。萬葉あかねさす云云。愚案後拾遺に長能、紫の野にとよみしは山城今宮也。

百七十七

陀羅尼は 曉

○陀羅尼——名義集云、秦言能持。集善法能持令不散不。又摩訶不思持。謂持善不失持惡不生。此双紙の心はだらにはあかつきよみてよしと也。前にいへるずみぐだらに、尊勝だらに、千手だらにの類にや。一切經藏効戈の二箱に、陀羅尼集十卷あり。其外諸經のだらにあげていひがたし。



百七十八

讀經は 夕ぐれ

○どきやうは——看經などなるべし。

百七十九

遊びは 夜、人の顔見えぬ程。

○あそびは——音楽をもいひ、又よろづのあそびわざをもいふべし。

百八十

遊び事は 様あしけれども、鞆もをかし。小弓、韻塞、碁。

○まり——順和名云、蹴鞠以足遊踏也。打毬毛丸打者也云云。愚案蹴鞠はよのつねの鞠也。打毬は手まりの類也。又圓機活法に、擊毬あり。杖にてうちて上せしむるあそび也。

○こゆみ——源氏若菜の上巻に月のうちに、小弓もたせてまゐり給へとあり。

百八十一

枕 一是は音楽の事なるべし

子 一前註

一イ木、拍舞、こまの一越調云

舞は 駿河舞、求め子。太平樂は、様あしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いと面白し。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに、鳥の舞、拔頭は、頭の髪ふりかけたる目見などは、恐しけれど、樂もいと面白し。落躑は、二人して膝踏みて舞ひたる。拍がた。

○するがまひ、もとめこ——東遊是也。花鳥餘情云、東遊譜云、先一二歌、次駿河舞。次求子。次加太於呂之、調子高麗双調也。

○たいへいらく——順和名の道曲調の所に云、太平樂出時曲、謂之胡少子武昌樂。合歡臨太平樂之急也云云。

○もろこしにかたきにぐして——漢高祖楚項羽と鴻門の會に、酒宴の半に、項羽の臣、亞夫高祖をうたんとて、項莊に劍をぬいてまはしめて、ひまあらばと高祖をうかがふに、項伯といふ者、高祖をいたはりて、劍をぬいて共にまひて、高祖をへだておほひて終にうたせざりし。この項莊が舞を太平の曲をまひしと太平記にもしるせり。是を敵にぐしてあそぶといふなるべし。史記九十一、樊噲が傳に委し。

○鳥のまひ——河海云、鳥樂、迦陵頻也。一越調也云云。順和名に沙陀調の曲、迦陵頻。妙音天淨南竺國に此舞を傳ふ。婆羅門僧正これを見て、受け傳へて唐地にとどめず。本朝に傳ふ云々。  
○ばとう——拾芥云、拔頭乞食調云云。但和名道調曲の中に云、拔頭、拔音如レ



末云々。

○らくそん——落蹲、高麗一越調の樂也。納蘇利ともいへり。五月六日の鼓馬の日、雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり。

百八十二

引ものは琵琶。さうのこと。

○琵琶——和名云、振、琵琶撥名也。今案琵琶類有ニ四柱、又琵琶體有ニ反首轉覆手承絃撥面落帶滿月等之名云々。胡國にて馬上にて引く物也。又魏武帝造れり云々。

○さうのこと——和名云、箏形似瑟而短。有二十三絃云々。神農造又蒙恬所造。秦聲也云々。

百八十三

調は風香調。黃鐘調。蘇合の急。鶯の囀と言ふ調。想夫戀。

○ふからでう。わうじきでう——琵琶の風香調、黃鐘調。河海云凡琵琶は風香調、反風香調祕曲あり。楊真操流泉曲也。仍以ニ此兩調子爲レ先。琵琶の黃鐘調は笛の平調に合する也。掃部頭貞敏四調を定めたり。風香調は合ニ笛黃鐘調。反

一目にたらぬものなれば也  
二忍びてきたる男なごの忘れ置きたる也  
三イ、たて文の四笙の笛也  
五笙はよこぶんのやうならでかさ高ければ也

風香調は合ニ笛一越調及調。黃鐘調は合ニ笛平調。清調は合ニ笛平調整涉調。○そかうのきう——蘇香急。和名云、盤涉調、蘇合香、大曲。俗只云ニ蘇合一云々。其樂の急譜別にあり。二反めの時口傳ありとぞ。  
○うぐひすのさへづり——春鶯囀。和名に一越調云云。源氏花宴に、春の鶯さへづるといふまひいと面白くとあり。此樂の事なるべし。

百八十四

○さうふれん——想夫憐。相府蓮。和名平調。河海同。愚案太平廣記二百四十二謬誤部云、所司空于頤以樂曲有想夫憐之名、嫌其不雅、將欲改之。客有レ笑曰、南朝相府曾有二瑞蓮。改レ歌爲ニ相府蓮。自是后人語誤及レ不レ改。國史補。  
笛は横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やうく近うなりゆくもをかし。近かりつるが遙になりて、いと仄かに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れて持たるも、何とも見えず。さばかりをかしき物は無し。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、たゞ文のやうに見えたり。笙の笛は、月の明きに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく持て扱ひにくくぞ見ゆる。吹く顔や如何にぞ、それ



大何とやらんよ  
 からぬ世  
 セイ、なめり  
 ハイ、かしがま  
 九イ、のこち  
 して  
 〇加茂臨時の祭  
 也  
 二身の毛たちて  
 面白き心也  
 三御前のかたへ  
 樂人の出づる也

は横笛も吹きなしありかし。箏は、いとむつかしう、秋の虫を言はば、響虫などに似て、うたて、け近く聞かまほしからず。まして悪う吹きたるはいと憎きに、臨時の祭の日、いまだ御前には出てはてて、物の後にて、横笛をいみじう吹きたてたる。あな面白と聞く程に、半許りより、うち添へて吹きのほせたる程こそ、只いみじう、うるはしき髪持たらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やうく、琴笛あせて歩み出でたる。いみじうをかし。

〇とほよりきこゆるが——人の笛ふきてありくをきく時也。又人のふきゐる所を、我がとほりてきくさま也。幽説皆可レ用。文選長笛賦云、乍近乍遠とあるおもかげ有り。

〇さうのふえ——笙、釋名云笙生也。象三物貫地生、以匏爲之。其中空以受簧也。説文曰、笙正月之音、物生故謂之笙。三簧象三鳳之聲。

〇ひちりき——説文云、箏、管也。卷三、藤葉爲頭、截竹爲管。出三胡地。〇なからばかりより——横笛の調の半分ほどより、ひちりきを吹きたるや。猶口傳。

〇うるはしき髪もたらん人もみなたちあがり——物のそぞろに面白き時は、毛髮立ちてぞつとする也。堀河後百首俊頼、「琴のねのことちにむせぶ夕ぐれは毛もいよ立ちぬそぞろさむさに」

百八十五

一賀茂の也、前  
 註  
 二是よりりんじ  
 のまつりの事を  
 云ふ也  
 三舞人、歌人な  
 らぬさまなり  
 四舞人竹の文、  
 青摺の袍を着す  
 五花鳥にあり  
 六舞従の半臂の  
 赤紙のやうすし  
 たるやうに也  
 七舞人、地盤の  
 袴を着す花鳥  
 にあり  
 八水。打目のつ  
 やめきし也  
 九陪従舞人など  
 猶おほくはら  
 せて見たき心也  
 一〇藤のかざしに

見る物は、行幸。祭の歸さ。御賀茂詣。臨時の祭。空曇りて寒げなるに、雪少しうち散りて、挿頭の花、青摺などにかゝりたる。えも言はずをかし。太刀の鞘の、きはやかに黒う斑にて、しらく廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかゝりたる。地摺袴の中より水かと驚くばかりなる打目など、すべていとめてたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必ず憎げなるもあるたは目はとまらぬ。されど、藤の花に隠されたる程はをかしう、猶過ぎぬる方を見送らるゝに、陪従の品後れたる。柳の下裳に、挿頭の山吹、おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、賀茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。

〇行幸——朝親行幸、野行幸、諸社の行幸の類也。拾芥儀式畧部云、行幸前陣、京職、神祇、内藏、彈正、兵部、民部、雅樂、治部、式部、官史、準人、少納王卿、左右近衛、中央、御輿、女官、侍中。後陣典藥、内膳、造酒下略、猶神社行幸の儀等委。

〇まつりのかへさ——加茂祭の翌日きのふの使の中少將、舞人等の歸さ也。禁中にも還立の儀あり。江次第六云、還立儀裝束如レ昨云云。



顔の見にくさの  
かくれたる事也  
二陪従はしゆる  
の文の青櫛の袍  
柳色下かきねを  
着する也、前註  
三品おくれたる  
物のかざしなれ  
は也

○御かもまうで——關白賀茂詣。卯月申日。公事根源云、此事は必ず賀茂祭の前日ある事也。主人は乗車にて、地下殿上の前駟有り。白妙の御幣、神寶の唐櫃やうの物をかたげもたしむ。琴持菅笠深杏といふ物を召し供す。上達部車をつらぬ。社頭にて神拜あり。上下略。

○かざしの花——臨時の祭に、薬を結びて裏として、挿頭の花を指して、長橋馬道の西のつまに立て、重土器を舞人哥人に給ひて、後かざしの花を給ふ。江次第委。

○かものやしらのゆふ露——愚案此哥かもの社の姫小松といふべきをゆふだすきと書きたがへしにや。古今集に冬の賀茂祭のうた、藤原のとしゆきの朝臣、「千早ふる賀茂の社の姫小松萬代ふとも色はかはらじ」此歌なるべし。但又同集に、「千早振るかもの社のゆふ露ひとひも君をかけぬ日はなし」といふ歌をうたへるにや。

一是より前にい  
ひし事を委しく  
いふ也  
二めさせ申す心  
也  
三イ、たてまつ  
るには  
四神々也

行幸に準ふる物は、何かあらん。御輿に奉りたるを見参らせたるは、明け暮れ御前に侍ひ仕うまつる事も覺えず、神々しく嚴くしう、常は何とも無きつかさ、姫まうち君さへぞ、やむごとなう珍しう覺ゆる。御綱の助、中少將など、いとをかし。

○御こしにたてまつり——天子の御輿は葱華とて、葱をかざると也。

○みつなのすけ——鳳輦の御綱を奉行する大舍人助をいふにや。百寮訓要云、

大舍人  
六東野子也、前註

大舍人寮宿直の事を司る。令に見えたり。節會の諸卿をめす事は、大舍人の役也。行幸の時、御綱などを奉行す云云。

一是亦一段也  
二行粧の奇麗なりし也  
三イ、いそぎ  
四イ、かき  
五敷敷  
六しをれし也  
七イ、いみじうい  
り  
八京にはまれなるにこの心也  
九イ、す  
一〇郭公に似せん  
二也  
三まつりのかへ  
さをまつ也  
三無期  
三齊院のめさる  
るものなるべし  
四かやうの駕輿  
丁、輿長など  
齋王の御あたり  
に、いかでまる  
るぞおそれが

祭の歸さ、いみじうをかし。昨日は萬の事麗しうて、一條の大路の廣う清らなるに、日の影も著く、車にさし入りたるも眩ゆければ、扇にて隠し、居なほりなどして、久しう待ちつるも、見苦しう汗などもあえしを、今日はいと疾く出て、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもちなへて見ゆ。日は出てたれど、空は猶うち曇りたるに、争て聞かんと、目をさまし起き居て待たる、郭公の、數多さへあるにやと聞ゆるまで鳴き響かせば、いみじうめてたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれ似せんとおぼしく、うち添へたるこそ、憎けれど、またをかし。つしかと待つに、御社の方より、赤き衣など着たる者どもなど連れ立ちてくるを、「如何にぞ。事成りぬや」など言へば、「まだ無期」など應へて、御輿、腰輿なども歸る。これに奉りて、おはしますらんもめでたく、け近く、争てさる下衆などの侍ふにかと畏し。遙かげに言ふ程もなく歸らせ給ふ。あふひより始めて、青朽葉ともの、いとをかし見ゆるに、所の衆の、青色白装束を、けしきばかり引きかけたるは、卯花垣根近う覺えて、郭公も蔭に隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乗りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ着て、簾取りおろし、物狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にて、日の裝束麗しくて、今日は一人づつ、をさくしく



一云前にまたむご  
 さいひし事也  
 天齋王の還御な  
 るべし  
 右出車などのせ  
 房の出でたち也  
 六麴座の御也  
 元白重、夏の服  
 也  
 三白重の色、卯  
 花に似たる心也  
 二祭の日也  
 三二藍直衣也  
 三東帯也  
 一車に一人づ  
 つ也  
 云おさなしき心  
 也  
 云後  
 至わらばにて昇  
 殿の人也  
 云物見の人歸路  
 をいそぐさま也  
 元車よりかやう  
 にないそぎそご  
 いふ也  
 云車副などのい

乗りたる後に、殿上童乗せたるもをかし。渡り果てぬる後には、などかさしも感ふ  
 らむ。我もくと、危く恐ろしきまで、前に立たむと急ぐを、かうな急ぎそのど  
 やかに遣れ」と、扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣  
 き所に、強ひて止めさせて立ちたるを、心許なく憎しとぞ思ひたる。競ひかゝる車  
 どもを、見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき程にやり過して、道の山里め  
 き衰れなるに、うつ木垣根と言ふ物の、いと荒荒しうおどろかしげに、さし出た  
 る枝どもなど多かるに、花はまだよくも開け果てず、蕾勝に見ゆるを折らせて、車  
 の此方彼方などにさしたるも、桂などの萎みたるが口惜しきに、をかしう覺ゆ。遠  
 き程は、えも通るまじう見ゆる行く先きを、近う行きもてゆけば、さしもあらざり  
 つるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引き續きて來るも、たゞなる  
 よりはをかしと見る程に、引きわかるゝ所にて、「峰にわかるゝ」と言ひたるもをか  
 し。

○雲林院ちそくるん——紫野の邊にや。前註。  
 ○ことなりぬやと——事成る時至れりやと問ふ也。  
 ○またむご——無期、いつともなしとの心也。赤ききぬ着たる物どものこと、  
 也。  
 ○御こしたごし——江次第六、賀茂祭、路頭次第云、長官御輿駕輿丁前後廿人。

三せんかたなく  
 て也  
 三車をや  
 三くるまそひな  
 びの心也  
 高跡より來る車  
 也  
 云我車を也  
 云今さしたる卯  
 花なれは也  
 云後也  
 云車わかる、所  
 にて男の詠吟す  
 る也

輿長左右各五人。女婿十人。執物十人。腰輿上下略。  
 ○これに奉りておはしますらん——齋院是にのりておはすらんと也。齋院道の  
 ほどは御車にて、御社近くては腰輿に召さるゝ也。江次第六、路頭次第云、齋  
 王先詣三下社。暫留三社頭小社。脱三却衣裳。更三清服。即駕三腰輿。入三社用三輿長。  
 行列在式。未三到三社。許丈齋王下三腰輿。步行以三兩面。布三道。就三社前左殿座。事  
 畢。出三社外。駕三牛車。參三上社。下略。  
 ○あふひよりはじめて青朽葉どもの——人々のかざせるあふひ草、青朽葉のき  
 ぬなど也。桃華葉云、青朽葉、表青丹の黒みあり、裏青云云。イ本遙にいひ  
 つれど程もなく歸らせ給ふに、御使ひのかざしの葵もすこしなやか也。桂の  
 葉もうちしほみて、中々いとえんに見えたり。御車の過させ給ふ匂ひより始め、  
 出し車どもの扇、からきぬ、青朽葉なるなどもなまめかしう見ゆる。雑色所の  
 衆のあを色云々。

○郭公も蔭にかくれ——「なく聲をえやは忍ばぬ郭公初卯の花の蔭にかくれて」  
 人丸前註。  
 ○齋院のえんがにて——齋院の變の垣下にまゐらるゝなるべし。祭の日二獻の  
 時、舞人に垣下の公卿勸盃の事、紅次第にあり。けふもさやらの儀式あるに  
 や。弄花抄云、大變などにも、人数の外の人の交りたるを、垣下の君達といふ



也云云。  
 ○かつらなどのしほみ——きのふのあふひにそへし桂のしほみしに、今さしたる卯花のあたらしきが見事なる也。  
 ○とほきほどはえもとほるまじう見えたる行ききを——さきに車せきつゞきて遠く見ればとほりがたく見えしも、近くゆきもてゆけばさもあらぬと也。  
 ○みねにわかるゝ——古今戀「風ふけば峰に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か」

百八十六

枕 草 子  
 一是より例の筆のすさび也  
 二イ、たゞさまになが／＼とゆけは  
 三清潔なる也  
 四生垣なるべし  
 五イ、たりけるにおきあがりてふもかへ

五月ばかり山里に歩く。いみじくをかし。澤水もげに只いと青く見えわたるに、うへはつれなく草生ひ茂りたるを、長々とたゞ様に行けば、下はえならざりける水の、深うはあらぬと、人の歩むにつけて、迸あげたるいとをかし。左右にある垣の、枝などのかゝりて、車の屋かたに入るも、急ぎて捕へて折らんと思ふに、ふと外れて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかかへたる香も、いとをかし。  
 ○うへはつれなく草おひ——うへは何ともなく水草生ひたる也。後撰戀五「蓮葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ」此詞ばかりとれ

リ。

○ちかうかゞへたる香——蓬の匂ひの間近くしたる心也。前にも汗のかすこしかがへと有り。

百八十七

枕 草 子  
 一是亦一段也  
 二君達などのおさま也  
 三車の内にてひく也  
 四是は我のりてゆくさま也  
 五炬火なり  
 六香也

いみじう暑き比、夕涼みといふ程の、物の様などおほめかしきに、男車のさき追ふは、言ふべき事にもあらず。たゞの人も、後の簾あけて、二人も一人も乗りて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶弾きならし、笛の音聞ゆるは、過ぎて往ぬるも口惜しく、さやうなる程に、牛の鞞の香の、怪しうかき知らぬさまなれど、うちかゞれたるをかきこそ、物狂ほしけれ。いと暗う闇なるに、先にともしたる松の煙の香の、車にかかれるもいとをかし。

○あやしうかぎしらぬさまなれど——鞞の香なれば也。  
 ○物くるほしけれ——狂の字也。あやしき物の香に愛着すれば也。

百八十八

231  
 一是亦一段也  
 二イ、こり

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れてあやしきを、引き折りあげたるに、其折の香残りてかゞへたるも、いみじうをかし。



○其折のかのこりて——端午の頃の香也。イ、其折の香のおなじやうにかゞれたるもいみじうをかし云云。

百八十九

一是亦一段也  
ニイ、すき  
三香の残りたる也

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引き被きたる中に、煙の残りたるは、今のよりもめでたし。

○いまのよりもめでたし——今焼きたる香よりも也。或本に此あとに「六月廿日ばかりにいみじう暑きに、蟬の聲のみ絶えず鳴き出して、風の氣色もなきに、いと木高き木どものおほかるが、木くらく青き中より、黄なる葉のやうくひるがへりおちたるこそ、すゝろに哀なれ。秋の露おもひやられて、おなじ心にいみじう暑きひるなかに、いかなるわざをせんと、扇の風もぬるく侘しければ、氷水に手をひたしなどあつかひて、只今何ばかりなる事あらんに、此暑さを忘れて心うつす事ありなんやといふほどに、あたり匂ふばかりなる薄やうを、なでしこのいみじう色こきに、むすびつけたる文をとりいれたるこそ、出づらんほどのあせおもひやるも、心ざしあさくはあらじと思ふに、かくつかふ風だにあかずぬるくおぼえつる扇もうちおきて、まづひきあけつべけれ云云。

一イ、山ふき、  
櫻の花びら

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

百九十

○水のちりたるこそをかしけれ——イ、此次に、「下やだれを高やかにおしはさみたれば、車のながえはいとつやゝかに見えて、月の影のうつりたるなどいとをかし。行き付くまでかくてあれかしとおぼゆ」とあり。

百九十一

おほきにてよき物 法師。くだ物。家。餌囊。硯の墨。男の兒の目、餘り細きは女めきたり。又鏡のやうならんは恐ろし。火桶。酸漿。松の木。山吹の花。馬も牛も、よきは大きにこそあめれ。

- くだ物——和名、菜、クダモノ。菓子也。
- ゑぶくろ——鷹の餌囊也。
- かなまり——金椀也。前註。
- 花びら——和名云、葩。草木花片也。



一 簪也  
 二 世俗のおはした也  
 三 裝束也、腰の糸ぶくろのかざりを風流にせし也  
 四 御厨子黒棚也  
 五 圓座也

短くてありぬべき物 頓の物縫ふ絲。燈臺。下家女の髪、麗しく短くてありぬべし。人の娘の聲。

百九十二

○とみの物ぬふ——急ぐ物を縫ふ絲也。

○とうだい——燈臺。

○人のむすめのこゑ——舌つきにてあいだれたるをきらへるべし。

百九十三

人の家につきくしき物 厨。侍の曹司。幣の新しき。懸盤。童女。はした物。御立障子。三尺の几帳。裝束よくしたる餌囊。傘。書板。御厨子。提子。銚子。中の盤。圓座。臂折りたる廊。ちくわう繪かきたる火桶。

○くりや——厨。和名。宇樂云、厨、烹飪之所、ものを烹調するところ。臺所なるべし。

○侍のさうし——曹司ハ局と同。今の世の部屋。

○かけばん——懸盤。貴人の膳に用ゐる。源氏若菜院の御まへに淺香のかけばんとあり。

一 童女也  
 二 拍也  
 三 着なれたる也  
 四 土也  
 五 さはりゆく也  
 六 愛敬也  
 七 返事もせで也

物へ行く道に、清けなる男の、立文の細やかなる持ちて。急ぎ行くこそ、いづちならんと覺ゆれ。又、清けなる童女などの、拍いと鮮やかにけあらず、姿えはみたる、履子の艶やかなるが、革に土多く附いたるを履きて、白き紙に包みたる物、若しは箱の蓋に、草紙どもなど入れて持て行くこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ。門近なる所をわたるを呼び入るゝに、愛敬なく應へもせて行く者は、使ふらんこそ推し量らるれ。

百九十四

○童女、はした物——イ本、おほきやかなる童女、よきはした者とあり。  
 ○中のばん——中盤。懸盤の次なるを云ふ也。河海云、延長御記曰、米女調ニ和若菜羹、供進。給侍臣一盛ニ中盤、置ニ中盤、下略。  
 ○ひぢをりたるらう——臂折廊也。廊のをれまがりゆく也。  
 ○ちくわうゑかきたる——竹簞畫也。桐火桶などに竹に簞などゑにかきし也。

○けいし——前にも出でたり。革付のはき物なるべし。  
 ○つかふらん人こそ——其従者のすげなきをつかふ主人も、さぞなどおもはるゝと也。



一歳々さびしき心也

行幸はめでたき物、上達部、君達、車などの無きぞ、少しさうくしき。

○上達部君だちなどの——行幸には公卿以下歩行にて供奉なんば也。

百九十六

杖 草 子

一車の装束也  
二句  
三あまりやつしたるはさ也  
四見ぐるしき車のさま也  
五よその車のまさりし也  
六さやうに見苦してはみるぞこ也  
七他の車をおしわけて、清少の近所になつる也  
八よき車にのりたるゆゑ也  
九車の轡を居張る也、まつりを

萬の事よりも、作びしげなる車に、装束悪くて物見る人、いともどかし。説教などはいとよし。罪失ふ方の事なれば、それだに猶強なる様にて見苦しかるべきを、況して祭りなどは、見てありぬべし。下籠も無くて、白き單のうちたれなどしてあめりかし。只其日の料にとて、車も下籠も仕立てて、いと口惜しうはあらじと出たるだに。優る車など見つけては、何しになど覺ゆる物を、況して如何許りなる心地にて、さて見るらん。おりのぼり歩く君達の車の、おし分けて、近う立つ時などこそ心ときめきはすれ、好き所に立てんと急がせば、疾く出て待つ程、いと久しきに、居張り立ち上りなど、暑く苦しく、待ち困する程に、齋院の垣下に参りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ入つ引き續けて、院の方より走らせて來ること、事なりにけりと驚かれて嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに、水飯食はすとて、雑敷のもとに、馬引き寄するに、覺えある人の子供などは、雜色な

杖 草 子

まつてい也  
一困也、くるしむ也  
二垣下、前二註三車也  
三齋院のかたより也  
四水飯也  
五御前の中に良家の子女なる也  
六馬の口さるさま也  
七齋院の御輿也  
八イながえども我車のまへに今きたる車のたつ也  
九下人を制し兼ねて主人にこころをわする也  
一歴々の物見ぐるま也  
二物見すべき所のある也  
三歴々に見ゆる車也  
四伊すなご

どおりて、馬の口などしてをかし。さらぬ者の、見も入れられぬなどぞ、いとほしげなる。御輿の渡らせ給へば、籠もある限り取り取りおろし、過させ給ひぬるに、惑ひあぐるもをかし。其前に立てる車は、いみじう制するに、「などで立つまじきぞ」と、強ひて立つれば、言ひ煩ひて、消息などするこそをかしけれ。所も無く立ち重なりたるに、よき所の御車、人給引きつゞきて多く來るを、いづくに立たんと見る程に、只前ども只下りに下りて、立てる車どもを、只のみにのけさせて、人給續きて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所ある方にゆるがしもて行くなど、いと化しげ也。きら／＼しきなどをば、えさしも推しひしがずかし。いと清けなれど、又ひなびあやしく、下衆も絶えず呼び寄せ、ちこ出しすゑなどするもあるぞかし。

○よろづの事よりも——是より行幸に上達部の車のなきがさうくしきといひしに付けて、車の見ぐるしげなるがわるき事どもをいふ也。

○説經などはいとよし——説經聽聞の車などは、罪うしなふ後世のためなればさまで風流に華麗ならでもよしと也。

○見でありぬべし——て文字にこりてよむ也。祭見る車見ぐるしくば、見ずしてあれかしと也。

○たゞ其日のれうにとて——祭見んためにとと也。是より祭の物見車は花や



三、しめやかならぬさま也

かに有りたき心をいふ也。

○何しになど——かく人におとるさまにては、何しに物見に出でたるぞと覺ゆると也。

○よき所にたてんといそがせば——物見のたよりによき所を、人よりさきにとおもひて、車をいそがせ催したる心也。

○御前どもにするはん——前駆の人々に、水飯とて湯づけなどやらの物をくはする也。

○すだれもあるかぎりとりおろし——齋院へおそるゝさま也。イ本ながえどもとは、車の轆をおろし、牛をはなちたるさま也。是も禮儀なるべし。

○人給ひひきつゞきて——副車、延喜式。和名云、漢書註云、副車、ハコトヒ後乘也。河海云、人給。俊國卿記權記有、此名出車云云。花鳥云、出車は公方より點せられて、其人に給ふゆゑに、人給と名付くる也。

○たゞのけにのけさせて——源氏葵卷の車あらそひの所にも、ざぶ／＼の人なき隙を思ひさだめて、みなさしのけさすといへるさまに似たり。

○うしかけて——いままではながえをおろして、しちにたてておきしなるべし。

百九十七

一、さまらすべき人也  
 二、人々の沙汰する也  
 三、后宮の御事を申す也  
 四、清少心也  
 五、人のかたちはみえず、手ばかり也  
 六、后宮  
 七、后宮をはめ申す也  
 八、便なき人かよはせしを、はぢて御事さいへるおもしろきにや  
 九、御返事也  
 一〇、清少  
 一一、なき名たつ事をいへり、雨にぬるる縁也

「細殿に便なき人なん、噺に笠さゝせて出でける」と言ひ出でたるを、よく聞けば我が上なりけり。地下など言ひても目安く、人に許されぬばかりの人にもあらざめるを、怪しの事やと思ふほどに、上より御文持て来て、「返事只今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠のかたを書きて、人は見えず、只手の限り笠を捕へさせて、下に、

「三笠山山の端あけしあしたより」

と書かせ給へり。猶はかなき事にも、めでたくのみ覚えさせ給ふに、恥しく心づき無き事は、いかで御覽せられじと思ふに、さる虚言などの出てくるこそ、苦しけれどをかしうて、異紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

「雨ならぬ名のふりにけるかな」

さてや、濡れ衣には侍らん

と、啓したれば、右近内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけり。

○ほそどのに——清少の廊の局に忍びてとまりし人、雨ふる曉歸りし事を沙汰せしなるべし。

○地下などいひても——彼とまりし人の事をいふ也。地下とは昇殿せざる人はいふ也。地下の人ながら、めやすき人と世にもゆるされしを、便なくとめまじき人といふがあやしきと也。

○大がさのかたをかきて——彼御文のさま也。繪にかゝせ給ふ也。



一勅物云、二年五月  
 二后宮の御腹に備子内親王教康親王などおはす也、前二註  
 三青刺にて調したる菓子也  
 四清少より后宮へ奉る也  
 五までこしとい

○みかさ山——后宮の御連歌なるべし。彼笠さへせて出でたる朝より、さまぐ人のいふ事あるを仰せらるゝなるべし。  
 ○はづかしく心づきなき——萬事めでたき后宮に、心付きなきふるまひは見えずすまじとのみ遠慮しつるに、かゝるうはさ出で来てしられまゐらせし苦しきよと也。  
 ○雨ならぬ名の——清少の付句也。心はかゝるうき名の世にふりて、后宮にまでしられまゐらせしはづかしさよとの心なるべし。  
 ○右近の内侍——前註。

百九十八

三條の宮におはします比、五日の菖蒲の興など持ちて参り、薬玉まゐらせなど若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮つけさせ奉り、いとをかしき薬玉外よりも参らせたるに、青刺といふ物を、人の持て来るを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷きて、「これまぜこしに候へば」とて参らせければ、  
 皆人は花や蝶やと急ぐ日も我が心をば君ぞ知りける  
 と、紙の端を引きやりて書かせ給へるも、いとめでたし。  
 ○三條の宮に——勅物云、長保元年八月九日自職御曹司一移御生昌三條宅

ふに同じ、まゐりこし物なれば也  
 大后宮御歌  
 七青刺つ、みしうすやうのはし也

○さうぶのこし——菖蒲興、禁中へ奉るを、后宮へもまゐらせしなるべし。公事根源端午の所に云、六府あやめのこしを南殿の東西に立つ。又時の花を折りそへて同じくおく。四日は朝餉の庭に、これを立つ云云。雲圖抄に圖あり。  
 ○みくしげどの——薬玉は絲所より奉れど、姫宮などには女中何も手づからしてまゐらせらるゝなるべし。拾芥云、御櫛笥殿在二貞觀殿中二以上藤女房二爲二別當二云云。  
 ○昔人は花や——みな人は薬玉さして、花蝶と色々細工を急ぐ端午の日も、清少は我心を知りて、青刺を進らせて、満足と御戯也。

百九十九

十月十餘日の月いとあかきに、歩いて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣を上に着て、引き隠しつゝ有りし中に、中納言の君の、紅の張りたるを着て、頸より髪をかいこし給へりしかば、あたらしきぞとはにいとよくもにたりし哉。観負の佐とぞ、若き人々はつけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。  
 ○十月十餘日——これより別段なるべし。  
 ○くびよりかみをかいこし——源氏浮舟巻に、かみわきよりかいこしてとあり。也足軒御説、髪を脇の下より手に取たる跡也云云。是も首の程より前へ取れた



一 是より五くだりイ本になし  
 ニイも  
 三 成信はひそかにいふ事をもちき知り給ひしこ也  
 四 奇特なれし含めたり

二百

○ゆけひのすけ——左右衛門佐也。赤衣をきる物なれば、中納言をたとへしにや。  
 るさまにや。

成信の中將こそ、人の聲は、いみじうよう聞きしり給ひしか。同じ所の人の聲などは、常に聞かぬ人は、更にえ聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見わき聞き分かぬ物を、いみじうみそかなるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

○成信の中將——勅物云、源成信兵部卿致平親王男。母左大臣雅信女。長徳四年左中將、元民部大輔。

二百一

大藏卿ばかり耳とき人無し。誠に蚊の腿の落つる程も、聞き付け給ひつべくこそ有りしか。職の御曹司の西おもてに住みし比、大殿の四位少將と物言ふに、側にある人、此少將に「扇の繪の事言へ」とさゝめければ、「今彼君立ち給ひなんに」と、みそかに言ひ入るゝを、其人だにえ聞きつけて、「何とか」と耳を傾くるに、手をうちて「憎し。さの給はば、今日はたゝじ」との給ふこそ、争て聞給ひつらんと

五 此正光のみ、さきをいふかり也  
 六 イ、なに／＼、七 イ、遠くゐて八 正光の詞也、我立ちてのみいはんとの給ふがにくきはごに也、たはぶれ也

あさましかりしか。

○大藏卿——勅物云、正光、長保二年藏人頭左中將。四年十月大藏卿。愚案參議正光。關白兼通公六男。母左馬頭有年女。

○蚊の腿のおつるほど——もろこしに股師といふ物、患三耳、聰二牀下蟻動二謂之半、聞一と蒙求にあり。列子湯問篇に、焦螟といふ虫、群飛びて、集二於蚊腿一を、世にめよくみみとき人も、其形聲をえ見聞かぬを、只黃帝と容成子と神を以て見れば泰山の阿のごとく、氣を以てきけば雷霆の聲のごとしと云云。  
 ○其人だにえきゝついで——彼そばにある人の扇の事いひしが事也。

二百二

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つ方に、しどけなく磨り平めかし、らうおほきに成りたるが、ささしなどしたるこそ、心許なしと覺ゆれ。萬の調度はさる物にて、女は鏡、硯こそ、心の程見ゆるなめれ。おき口のはざめに塵るなど、打捨てたる様こよなしかし。男はまして、文机清げに押しのごひて、重ねならずば、二つ懸子の硯の、いとつき／＼しう、蒔繪の様も、態とならねどをかしうて、墨、筆の様なども、人の目とむ許り仕立てたるこそをかしけれ。とあれどかゝれど同じ事とて、黒箱の蓋も、片し落ちたる硯、懂かに墨のゐたる、塵の此世には拂ひ難げなるに、水うち流

一 勞の字也、墨の久しくつかはれし心也  
 二 或説二墨指といふ物也云云  
 三 筆おく所のあはひをいふ也  
 四 文机  
 五 重硯也  
 六 二懸子の硯也  
 七 つきのよき也  
 八 墨はかりある



心也、よりかけの黒也  
 九面白き詞なるべし  
 二〇龜の首許見えたる也  
 二一ひさ目わろき心也  
 二二是より又別の事也  
 二三人の我筆つかふをも也  
 二四よからぬありさま也  
 二五すみもよくすらぬ心也  
 二六假名に也  
 二七筆をたけ捨てたる也  
 二八筆の頭也  
 二九裏へより給へる也  
 三〇前をうけていふ也  
 三一三句

して、青磁の龜の口落ちて、首の限り穴の程見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手習ひをも文をも書くに、「其筆な使ひ給ひそ」と言はれたらんこそ、いと佗しかるべけれ。うち置かんも人わろし。猶使ふもあやにく也。さ覺ゆる事も知りたれば、人のするも言はて見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物書かまほしうするが、いとよく使ひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさし濡して、「こはものややり」と、假名に細櫃の蓋などに書き散らして、横様に投げ置きたれば、水に頭はさし入れて伏せるも、憎き事ぞかし。されどさ言はんやは。人の前に居たるに、「あな闇。おうより給へ」と言ひたるこそ、又佗しけれ。さし覗きたるを見付けては、驚き言はれたるも、思ふ人の事にはあらずかし。

- 塵ばみ——塵のたまれる也。源氏須磨巻にだいはんなどかたへはちりばみとあり。
- 女はかゞみ硯こそ心のほど見ゆる——鏡は女のかたち作る物也。はおろそかなるは不暗なる心と見え、よきは心にくかるべし。硯は手かく人よくたしなむべければ、おろそかなれば手をすかぬ心見ゆべしと也。
- こよなし——無越也。こゆる事もなく、危相に捨て置きたるさま也。
- とあれどかゞれど——よくもてなしても、あしくても、物かけばおなじ事とあり。

- の心也。是より物にかまはぬ硯さまをいふ也。
- くろばこのふたもかたしおち——蒔繪せぬ黒染の硯箱の蓋のふちのかた／＼かけたるなり。
- あをじのかめ——青磁龜也。燒物の水入の龜の形なる也。
- 猶つかふもあやにく也——文惡。進退しにくき心也。人にいはれて筆を置くも人めわるし。猶つかふも如何と迷惑したる心也。
- さおぼゆるもしりたれば——さやうに迷惑なるも、思ひしりたればとなり。
- こはものややりと——あとなし事をめたと書付けたるさまにや。
- ほそびつのふた——ぬり桶也。前註。
- されどさいはんやは——さやうに悪くつかひなすとて、其筆なつかひ給ひそともいふべき事ならねせんかたなしと也。
- さしのぞきたるを見つけ——我のぞくを、人見付けて驚きてとがめらるゝも、佗しきとふくめたる詞也。いはれたるもと句を切るべし。
- おもふ人の事——是はよのつねの人のとがめたるが佗しきをいふ也。思ふ人をのぞきとがめられし事にはあらずと也。



一今さらにいふべきならぬ也  
二消息也  
三遠所の朋友親類などにても也  
四文のめでたきをほむる詞也  
五心もなき心也  
六目くれ胸ふたがる心也  
七いまだ其文やらねども先づ心はなぐさむ也

「珍しと言ふべき事にはあらねど、文こそ猶めてたき物なれ。遙かなる世界にある人のいみじくおぼつかなく、如何ならんと思ふに文を見れば、只今さし向ひたるやうに覺ゆる、いみじき事なりかし、我思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行き着かざるらめど、心行く心地こそすれ。文といふ事無からましかば、如何にいふせ、くれふたがる心地せまし。萬の事思ひく、て、其人の許へとて、細々と書きて置きつれば、覺東なさを感む心地するに、況して返事見つれば、命を延ぶべかめる、げにことわりにや。」

○あしこまでもゆきつかざるらめど——あしこはかしこ也。其文いまだ彼地まで行付くまじけれど、我心はまづおちつく心也。  
○げにことわりにや——文をめでたき物といふは、まことにことわりならずやと也。イ本此次に川はあすか川ふちせさだめなくなどあり。前に出でたれば今其本を用ゐず。

春曙抄九終

昭和七年四月十五日 印刷  
昭和七年四月廿日 發行

既 草 子 中 巻 \*

定 價 四 十 錢

校 訂 者

池 田 龜 鑑

發 行 者

東 京 市 神 田 區 一 ツ 橋 通 町 三 番 地  
岩 波 茂 雄

印 刷 者

東 京 市 本 所 區 堀 籠 一 丁 二 七 番 地  
守 岡 功

岩 波 書 店 印 刷 社 會 式 株 限 公 司

岩 波 文 庫 教 科 書 版  
13

發 行 所

東 京 市 神 田 區 一 ツ 橋 通 町 三 番 地

岩 波 書 店

電 話 一 三 八 一 二 〇 八 番  
九 段 三 一 〇 九 二 六 二 六 番  
一 〇 三 三 〇 小 賣 部 專 用  
廣 告 口 座 東 京 二 六 二 四 〇 番



讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波 茂雄

理想は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。譬ては民を融味ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。其の廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯全圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を排撃するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の業務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は筆をかのレクラム文庫にとり、古今東西に五つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき處に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最良力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの學に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て富らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫教科書版目録

裝幀 四六 表紙フワイバ 刊

第一編	古事記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價一圓
第三編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價八十錢
第四編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌集	尾上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語	島津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語	島津久基校訂	定價六十錢



















れる様に、小さい形の中に、墨山の内  
容を盛る形式を探りました。  
 □ 購求の自由 しかも購者が全く自由に  
欲しい本を随時求められる自由選擇の  
方法を探りました。  
 □ 印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢  
等の實際的方面に於ても亦最善を期し  
ます。  
 □ 徳蔵は菊牛裁判、紙装、平福百穂畫伯  
装頓  
 □ 活字は八ポイントを用ひました。  
 □ 約百頁を單位として星一つを以てそれ  
を現はし、★一つ毎に二十錢の定價で  
す。  
 □ ★一つを1に算へて此の文庫の番號を  
進めてゆきます。  
 □ 番號はただ發行順に従つて之を追ふも  
のであります。  
 □ ★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は  
三百頁の本一冊なることを示し、百頁  
づつの分冊ではありません。  
 □ 送料(及び定價)は左表の通りです。  
 ★ 送料二十錢 送料二錢  
 ★★ 四十錢 四錢  
 ★★★ 六十錢 四錢  
 ★★★★ 八十錢 六錢

御註文は前金で御願ひ致します。小さ  
い本で極度の廉價なものですから必ず送  
料はお添へ下さい。切手代用は一割増  
に願ひます。

◆ 岩波文庫新刊書目 ◆

- |               |                       |        |     |
|---------------|-----------------------|--------|-----|
| 源氏物語          | 四                     | 島津久基校訂 | ★★★ |
| 三條西           |                       |        |     |
| 宗本榮花物語中卷      | 三條西公正校訂               | ★★     |     |
| 煤             |                       | 煙森田草平作 | ★★  |
| 支那通俗古今奇觀      | 青木正兒校訂                | ★      |     |
| 小説集           |                       |        |     |
| 獅子座の流星群       | ロマン・ロラン作              | ★      |     |
| マルクス神聖家族或は    | 片山敏彦譯                 | ★      |     |
| エンゲルス批判的批判の批判 | 石堂清倫譯                 | ★★★    |     |
| 史的に見たる        | 三木清譯                  | ★★★    |     |
| 科學的宇宙觀の變遷     | スワンテ・アールレウス著<br>寺田寅彦譯 | ★★     |     |



終

